

王への道

銀色の暗殺者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ツヴァイウィングのライブで家族を失い生き残った少年、時駆王馬は出来るだけ人と関わらないよう生きてきた、だがある事がきっかけで戦いに身を投じる、少年は何のために戦うのだろうか…

目次

王の目覚め	1
剣とライダー	3
激槍	8
気持ちの悪い気持ち	10
トップギア	16
ライダーの力	18
父の温もり	23
一時の休息	26
仮面のヒーロー様	29
新たな敵	32
鮮血	35
戦う理由	39

王の目覚め

悲鳴、血飛沫、嗚咽、涙、逃げ惑う人々、そんな景色が見える

「逃げろ…王馬…」

伸ばされた手は血まみれで熱が引いていく

「父さん！」

返事はなく先程まで伸ばされていた手には力がなくぴくりとも動かなくなつた

「王馬…ごめんね…私はもう…」

「母さん！」

こちらを涙を流して見つめる母は大きな瓦礫に押し潰され、鮮血が俺の顔に飛び散つた

「お兄ちゃん…助け…」

逃げ出す人の波に浚われ離れ離れになる妹…人の波をかき分けて妹の元に着いたがもう手遅れだった、妹の衣服と灰が残り既に妹はこの世に居ないと悟つた。そして目の前にはノイズの波が次はお前の番だと言わんばかりに襲いかかる

「皆…今そっちに…」

手を伸ばしその波に飲まれようと足を前に出した所で重たい目蓋を開き辺りを見渡す、どうやら病院のようだ、点滴が右腕に刺されておりカーテンを隔てた隣のベッドからいびきが聞こえてくる

「生きてる…」

自分の頬をつねると痛みを感じる。どうやら夢でも無いようだ

「たしか…ノイズにやられて…」

「目が覚めましたか、良かったです」

看護婦さんがカーテンを開けてベッドの横に腰掛けた

「あの、俺ノイズに押し潰されて…」

「ノイズに？瓦礫の下に閉じ込められては居ましたがノイズは近くに居ませんでしたよ、それにノイズに触れるとどうなるか、知っていますよね」

ノイズ、そう呼ばれる化け物は人に触れると自らもろとも灰にな

る、だから触れられて生きているはずが無い

「夢…だったのか？」

「明日の朝に検査をして状態が良かったらお家に…あつ」

看護士さんのしまったという顔がああ夢が事実だと俺に伝えた

「死んだ…んですね」

「…すいません」

「大丈夫です、地震や火事にあつたみたいな物です…仕方なかったんですよ…」

次の日、特に体に異常も見られず、無事に家に帰ることができた、家に帰ると一枚の手紙が置いてあつた

「ノイズの被災金か」

ノイズは認定特異災害とも呼ばれており、その名の通り災害なのだ、被災した場合補償金が振り込まれる事になっている

「金なんかで納得できるかよ…」

ベッドに入ると目蓋が重たく閉じていく

「なんで…俺だけ…生き残って…」

何の抵抗もせずそのまま微睡みに落ちていく、今は何も考えたくない……

—————

「見つけましたの…私の王様！」

世界の何処かにある洞窟で王の誕生に喜び飛び回る影が一つ

「日本ですか…流石に遠いですね…少しお待ちせしてしまいかも…いや！…どれだけかかろうとも必ずお側に向かいますとも！」

その影は人の形ではなく生き物と虫や動物とも似つかなかった

剣とライダー

あの事件から二年、俺はふらわーというお好み焼き屋さんに拾われた
た

「おばちゃんおはよう」

「おはよう！朝ごはんもうちよつとでできるからね」

椅子に座り何気なくテレビを見ていると変なニュースがやってい
た

「UMA発見？」

「なんか最近話題ねー、この辺りで空とぶ何かが目撃されて動画も
撮ってたらしいけど見たこと無い生き物だったみたいだよ」

「へえ」

ちよつとテレビにその動画が流れた……暗すぎて何がなんだか正
直分からん

「あつ、王馬午後つて空いてるかい？出前に行つてほしいんだよ」

「分かつたどこまで？」

おばさんは住所の書いた紙を一枚渡した

「ちよつと遠いんだけど電車使えばすぐだから。あとこれ使つて」

5000円を財布から出して俺に渡してきた電車代にしては多す
ぎる、そもそも小遣いならまだ残つてる

「電車つて言つてもこんないらんないよ」

「最近遊んでないでしょ、これ使つて楽しいところ行つといで」

「…ありがとうおばさん」

おばさんなりに心配してくれてるんだ、ありがたく受け取ろう

「UMAにあつたりしてね、なんて気をつけて行つてらっしゃい！」

「はーい行つてきます」

電車に揺られ出前を渡し、ぶらぶらと歩いているとCDショップが
目に映つた

「風鳴翼か…うん？」

店内を見回すと酷く荒れている、まるで空き巣にでも入られた様な

…

「この灰…ノイズか!？」

「助けてー!!」

女の子の助けを求める声が聞こえる、助けに向かおうとしたとき近くから現れた女の子とぶつかった

「おっと、ごめんよ」

「こつちこそすいません!」

「つと、こんなことしてる場合じゃ…」

声の聞こえた方に走ると女の子も同じ方に走って着いてくる

「君は危ないから逃げろ!」

「でも今声が…見つけた!」

女の子がノイズに迫られている、きつと助けを求めた女の子だろう

「くつ…俺がノイズを引き付ける!君はその子をつれて逃げろ!」

「そんな…!お兄さんはどうするつもりですか!」

「何とかなるさ…」

いい機会だあれが夢だったのかを確かめるチャンスだ

「おらあ!」

ノイズに勢いよく蹴りを入れるとノイズは後ろに倒れた

「生きてる…夢じゃなかったんだ」

対抗できると分かると少し気が楽になってきた

「でも数が多すぎるな」

「お兄さんも逃げましょう!」

二人で逃げさせるより俺が居た方が安全か…

「逃げるって言っても逃げ道が…こつちだ」

路地裏に逃げ込むと四方を囲まれた、どうやら誘い込まれたみたいだ

「しゃあない、飛び込むぞ!」

女の子たちの手を引き目の前の水の中に飛び込む

「はっは!…ここまでは来れないだろ!」

ノイズは水の中に飛び込みあとを追ってきた

「まだ追ってくんのかよ…」

その後も逃げ続ける俺たちをひたすら追ってくるノイズ達、そんな

追いかけてここにも終わりが訪れた。

工場の屋上、これ以上下がれば地面にまつ逆さま

「これ以上下がれば死んじまう、かといって逃げ場所ももうない、詰みってやつかな」

「まだです！諦めなければきつと何か…」

「お姉ちゃん…お兄ちゃん…死んじやうの?」

震えた声でそう聞く女の子、俺は近づいて頭を撫でる

「俺の前で誰も死なせるかよ、誰一人としてな！だから生きるのを諦めんな！」

「それって…奏さんの…」

「それを聞いて安心しましたの！我が王よ！」

ノイズの向こう側に本を小脇に抱えた女の子が見える

「誰？」

「私はウオズ！よろしくね！」

「おう、よろしく…ってこんなところに居ると危ないぞ！」

女の子はジャンプをすると人の形から1つの機械に姿を変えた、その姿はテレビで見たUMAと同じ姿をしていた

「なっ!?えっ…えー!？」

「驚いてる場合ではないですよ、さっそく変身行ってみましょう！」

機械が宙を浮き俺の腰にくつつくとベルトの様に腰に巻き付いた

「変身って…なんの事だよ」

「これを右側のスロットに挿して私を1回転させるんですよ」

ベルトに渡された物を受けると頭の中に自然と使い方が浮かんできた

「何がなんだか分かんないけど考えてる暇は無さそうだ！」

『ジオウ！』

「変身！」

ライドウォッチのスイッチを押し、ベルトに挿す、そして教えられた通りベルトを1回転させる

『ライダータイム！カメンライダージオウ！』

全身をスーツが覆い、ライダーの文字が顔に飛んでくる

「祝いなさい！この世界の王になる者の生誕を！」

「王とかお前の事とか聞きたいこといっぱいあるけど後回しにして蹴散らしますか！」

ノイズの群れに握りしめた拳を叩きつける、すると一撃でノイズが灰になった

「凄い：はっ！見てる場合じゃなかった、今のうちに：」

「お姉ちゃん！上に！」

女の子の声が聞こえた時二人の図上からノイズが飛びかかる

「なんか無いのか！」

「ジュウを使うんですよ！」

「銃？いったいどこにそんなのが！」

頭の中で銃を思い浮かべると目の前にジュウと文字が現れ銃が手元に現れた

「これなら！」

飛びかかるノイズを撃ち落とし女の子達を抱え飛び降りた

「よし、俺はあいつらを何とかする、君はその子を連れて避難所に向かってくれそんなに離れてないはずだ」

「分かりました！気を付けてくださいね、行こう」

女の子達は避難所の方へ走っていく

「さて、戦う力があってもこの数は流石にキツイな」

「そんな王にお土産ですよ！」

手元に新しいライドウォッチが現れた

「これは：マツハラライドウォッチか」

頭の中にまた名前と使い方が浮かんでくる

「詩島剛：マツハの生きざまも感じる：変身！」

『アーマータイム！マツハ！』

「追跡！撲滅！いずれもマツハ！仮面ライダージオウ！マツハアーマー！」

たなびくマフラーと白いアーマーを身に纏いマツハの能力である高速移動でノイズを片っ端から倒していく

「ふうー、マツハの力は制限があるんだな」

マツハアーマーを解き通常のジオウに戻る

「大体は終わったかな」

残りのノイズに目を向けた時大きな壁が目の前に落ちてきた
「ひっ!?!な、なに!?!」

「剣だ、ノイズをこの世界から取り除くただ一つの剣だ」

壁の一番上からこつちを見下ろす女性が見える

「剣?それにその声、風鳴翼!?!」

激槍

「はっ…はっ、大丈夫？ちょっと休もうか」

「…うん」

少女の手を引く立花響は路地裏の目立たない場所に身を潜めノイズが通りすぎるのを待っていた

「お兄ちゃん…大丈夫かな」

「きつと大丈夫だよ！心配ならお姉ちゃんと一緒にあとで探しにいこ」

「うん！」

立ち上がり避難しようとした時、四方をノイズに塞がれ絶対絶命に追い込まれるふたり

「私泣かないよ…だってお兄ちゃんが言ってたもん！」

「そうだ、私もこの子も生きるのを諦めない！」

そう決意を固めた立花響の体が光を放つ、そして胸の内に聞こえる歌を口ずさんだ

「Balwisyall Nescell gungnir tro
n」

—————

「くそ！何で俺が追われなきゃなんねえんだ!!」

「チヨロチヨロと！」

「こうなったらもう一回マツハで…といきたい所だが限界か…」

マツハは熱を排出しないと変身解除の危険がある、マツハの力を使うライドウオッチはその変身解除の危険も受け継いでいるのだ

「お土産のライドウオッチはそれだけですの、この状況はなんとか切り抜けて欲しいですの」

「なんとかって言ったってこっちは戦いなんて初めてだつての！」

「さつきから一人でごちゃごちゃと、何のつもりだ？」

「今あんたから逃げきる策を練ってんだよ！」

突然遠くで光が天高く突き抜け、俺たちの視線を釘付けにした

「なっ?!? ガングニールですか!?!」

「ガングニール? あの光の事か」

「チャンスです今のうちに逃げちゃいましょう」

「そうしよう」

光に気をとられているうちにこっそりと逃げ出す事に成功し、今日
はうちに帰った

「なんとか逃げ切れたな…疲れた、今日はもう寝るか、あーそういえば
お前の事どうするか」

「どうするとは?」

「拾ってきたって行っても空飛ぶベルトは受け入れてもらえないだ
ろ」

「そういうことでしたらお任せください! よつと」

ジクウドライバーは腰から外れると光を放ち始めた

「眩しっ! 夜なんだからあんまり近所迷惑は…やめ…ろ…」

「これでどうですか?」

光の中から小さな女の子が出てきた、ジクウドライバーと声と同じ
ところを見るとベルトから人の姿に戻っていた

「まあ…それなら大丈夫かな?」

それからふらわーのおばちゃんに行く宛の無い子供だと言って家
に泊めさせてもらった

「そういえばあなた名前はなんていうの?」

「私、ウオズです! よろしくお願いします! おば様!」

「嬉しいわーこんな可愛い女の子が子供に欲しかったのよー」

「えへへおば様だーいすき!」

「こいつ…馴染むの早すぎだろ」

気持ちの悪い気持ち

「先日ノイズが発生した事件についてですが…」

「最近多いわね、こういう事件」

「おばさんも気を付けてよ、なんかあったら助け呼んでよ」

「そうですよ！おば様にもしもの事があつたら私は…」

「ありがとうね、ウオズちゃんも王馬も気を付けるのよ」

「分かってるよ、ごちそうさま」

「どこかにお出かけかい？」

「はい！二人でお散歩なのです！」

なんでこいつはこんなに目をキラキラさせながら嘘をつけるんだ？俺は嘘はあんまり得意じゃないから少しうらやましいぜ

「行ってきまーす！」

「行ってらっしゃい」

家を出た俺たちは人気の無い所にやって来た

「さて、話を聞かせてもらおうか」

「どこから話しましょうか…私は太古の昔封印されたベルト、ジクウドライバーっていいいます、あなたのような特別な力を持つ者を導く役目をもって作られた存在」

「特別な力？ノイズに触れても死なない事か？」

「はい、あのライブがあった日に私も封印から目覚めて私の力を使いこなす王を探していた」

「王？俺が？」

「前回私を使っていたのは古代の王、オーマジオウって人…話の途中ですけど監視されています…5人程です」

ウオズの視線は俺ではなく俺の後ろに注がれていた

「何人だ？」

「多分5人ですでも急がないと昨日のおっかないお姉さんが来ちゃうかも」

「それなんだけどさ、昨日は流れで逃げちゃったけど翼さんは何者なんだ？」

「それを知りたいならついてきてもらおうか」

黒服の男に囲まれ銃口を向けられる、こっちはただの子供だ、この状況を何とかできる力はない

「王馬様にそのようなおもちゃは通用しません！」

「試してみるか？」

そう言った黒服の銃から弾丸が飛んでくる

『マガール！』

突然響いた機械音と共に弾丸は軌道を変え地面に向かっていった

「これはマツハの力か」

「はい！ある程度なら変身していなくても手に入れた力を使うことができるのです！」

「弾丸を曲げるなんて…化け物め！」

「化け物…」

化け物…もう耳にタコが出来るほど聞いた台詞だ…

「だったら化け物らしいやり方で話を聞かせてもらおうか」

「待て、彼に手を出すな」

バイクに乗った女性、風鳴翼がそう言うのと武器をおろし退いていく

「風鳴翼…」

「その力…君が昨日の仮面の人物で間違いないな」

「言い逃れは…無理そうか」

「王馬様！いきなりばれちゃいましたよ！」

「どうする、黙ってついてくるつもりなら危害は加えない」

諦めて捕まった後、手錠をかけられ目隠しまでされエレベーターの中で目隠しを外された

「…昨日の女の子達は無事なのか」

「じきに分かる」

長い長いエレベーターが気まずい雰囲気醸し出す三人を地下に連れていく。

とにかく無言がキツイいったいどこまで続いているんだ

「着いたぞ」

「ようこそ！特異災害対策機動部へ！」

目隠しと手錠を外され眩しさに目が慣れると、さっきまでの無言が嘘のような歓迎ムードだ

「チャンス！」

翼さんが呆れ、頭を抱えた瞬間マツハの力の1つ、どんよりと呼ばれる現象をその場に発生させた

「動きが…とれない…だと」

「油断したな！逃げるぞ！」

「はいです！」

どんよりによって動きを止めている間にエレベーターから逃げ出せばあとはマツハの力で逃げ切れれば…

「ふん！」

逃げ切れれば…!?

「なんであのおっさん動けてんだ!？」

「どんよりはあくまでも重加速をかけているだけ、つまり振り払うほどの力があれば動けてしまうのです！」

「ウオズ！」

「はいです！」

ウオズがベルトの姿になり腰に装着される

「変身！」

『仮面ライダージオウ！』

「落ち着いてくれ、こちらとしては協力を要請したいだけなんだ」

「やなこった…少なくともあんたらには絶対に嫌だね」

「…君の過去は調べさせてもらった、本当に申し訳ない…」

頭を下げ謝罪するおっさん…苦しむ家族の顔が浮かび頭を振って過去の幻影を振り払う

「…はあ、なんかやる気削がれちったな…ウオズ戻っていいぞ」

「はい」

どんよりを解き皆を動けるようにし、椅子に座りおっさんを見つめ聞いた

「で、協力するのはなんだ？」

「君にはそのノイズに対抗できる力がある、その力の研究とノイズ

退治の協力を要請したい」

「嫌だ」「駄目です」

「即答か…」

「まず、私の力は我が王しか使えません。いくら研究しても無駄ですから」

「俺の事を調べたなら分かってるだろ…なんで手を組みたくないか」
「…」

「俺は2年前のライブの事を忘れてない」

今までは助けられなかった自分を責め、家族の墓の前で謝り続けた日々だった。

だが翼さんにノイズを倒せる力があつたなら、なぜ俺の家族は…あのライブで大勢の人が亡くならなければならなかったのか…そう考えると怒りがこみ上げてくる

「そうか、君はもう一人の生き残り…」

「さすがに知ってましたか、時駆王馬あのライブから生き残った被災者ですよ」

「…」

「俺は…俺はあなたを許せない…あなたにその力がありながら俺の家族を…」

拳に力が入る、分かっているこの人を責めるのはお門違いだ…だが責めずにはいられないこの人がもつと強ければ…もつと速く駆けつけてくれれば…嫌な考えが頭のなかを支配していく

「くそー！」

力が入った拳で壁をぶん殴った、拳に血が滲んでいる、思っていたより強く殴ってしまったみたいだ

「王馬様!？」

「…すまないが頭を冷やしたい…お手洗いは何処だ」
「こちらです、ついてきてください」

一人の男に連れられトイレに向かっていく

「…こんなこと言いたかったんじゃないのに」

「翼さんも辛いんです…あのライブで奏さんが…」

連れてきてくれた男が話しきる前にアラートが鳴り響く

「ノイズか！ウオズ！行くぞ！」

「はいです！」

「ちよ…ちよつと待つ…!?!」

ウオズがベルトになり再度変身すると、大急ぎで来た道を戻り、エレベーターに突っ込んでいく

「待て！勝手に行かせるわけには…」

「止められるなら止めてみな！」

『マツハ！』

マツハアーマーを纏いスピードを上げエレベーターの上の壁をジカンギレードでぶち破りそこからライドストライカーに乗り壁を駆け上がる

「おおー！仮面ライダーのバイクすげえ！壁走ってる！ウオズ！壁走ってるって！」

「はしやぎすぎですよ、急ぎますよ！」

「おう！」

地上に出た俺たちは重大な事に気がついた

「あつ！どこにノイズが出たか聞いてない」

「大丈夫ですよ、ほら」

ウオズがそう言うのとホルダーから勝手に飛び出したライドウオツチが変形し空中に映像を映し出した

『ノイズは市街の方に出たみたいだ、二人はすぐに後を追ってくれ！』

『はい！』『了解しました』

「凄いなこれ、どうやって盗聴を？」

「ライドガジェット、ジオウの力の1つです！その名もコダマスイカアームズ！軽い戦闘とコダマスイカ同士で連絡を取り合う事が出来ます」

「でも市街ってだけじゃ絞りきれいな」

「だったらこの子の出番です！」

『タカウオツチロイド！サーチホーク！探しタカ！タカ！』

「この子は偵察、撃退とこなしてくれるライドガジェットです」

「タカちゃんか、任したぞ」
「私たちも探しに行きましょう」

トップギア

街中を探し回っているとタカウオッチロイドが戦闘中の翼さん達を見つけたようなのでついていく

「派手にやってるな、俺達もいくぞウオズ！」

「はい！」

ベルトに変わったウオズを腰に装着しジオウライドウオッチを使い仮面ライダージオウに変身する

「ウオズ、ノイズはどのぐらいいる」

「かなり多いです、すぐに片付けないと人のいる通りに出てしまします」

「スピード勝負かだったらこいつで」

『マッハ！』

「今日はあと2分しかマッハは使えません、やるなら一気に蹴散らしましょう」

「任せと…」「はあ！」

翼さんが俺を見るなり切りかかってきた、突然の事でバランスを崩した俺の手からマッハライドウオッチが転げ落ちる

「何すんだ！」

「ノイズを倒すのは私だ…お前は言ったな家族が死んだのは私のせいだ」と

「それだけの力がありながらあの事件で生き残ったのは俺ともう一人だけだった！だけどあの頃の俺とは違う…今はノイズとだって戦える」

「自らの為に振るう力はいつかその身を滅ぼすぞ、今のお前を戦わせる訳にはいかない」

自分の為に…確かにそうだ、ノイズが憎いのも翼さんを恨むのも……だったら俺は何で戦ってるんだ……

「翼さん！あそこに逃げ遅れた人が！」

「くっ…！間に合わない」

「やめた…」

「ん？」

ブランクライドウォッチが光を放つ

「ウダウダと考えるのはもうやめた…！今ここから走り出して誰かの命を救えるなら！」

『ドライブ！』

「脳細胞が…トツプギアだぜ」

『アーマータイム！ドライブ！』

ドライブアーマーを身に纏いウダウダと考えていた思考を払いのけて今はただ目の前の命の為に戦うんだ、他の事は戦い終わってから考える！

「祝いなさい！正義ではなく人を守る警官の力を継承し王への第一歩を踏み出したこの姿を！仮面ライダージオウドライブアーマー！」

道を塞ぐ翼さんをタイプスピードの能力で加速し抜き去る

「速い、この速さはあの白い装備よりも…」

「大丈夫ですか！」

「はい…ですが子供がまだ向こうで」

「俺が行きます、道はあの人たちが作ってくれるのであの人たちについていってください。見つけたら警察署まで届けます」

近くのノイズを倒し翼さん達のところまで道を作り子供がいると言う場所へ向かった

「ここか…おーい！誰かいるか！」

「誰か来たみたい、良かった」

物陰から小学生程の女の子と高校生ぐらいの女の子が現れた

「怪我はない？」

「私もこの子も無事です、でも外にノイズが」

「それなら大丈夫、俺が来るときに倒しといたから、お母さんの所まで送り届けるよ」

ライダーの力

警察署まで無事に二人を送り届け、帰ろうとしたとき

「それじゃ俺はこれで」

「ありがとう！仮面のお兄ちゃん！」

「ありがとうございます」

俺は復讐や憎しみで戦っていた…そんな俺は感謝されても良いのか、そんな考えが頭をよぎった

「じゃ、俺は行くから」

二人の前にいるのもばつが悪くなりさっさとノイズの群れの所まで走って向かった

「なんだ、もう終わったのか」

そこにはノイズはおろか翼さんたちも居なかった

「ウオズ戻っていいぞ」

「…王馬様…戦う理由なんて気にしなくてもいいと思います、大事なのは何故戦うのかじゃなくて何をしたかだと思うから」

「何をしたか…」

さっき助けた人達が浮かぶ、そうだ理由はどうあれ俺は確かに3人の命を救った、それで家族が帰ってくる訳じゃないけど俺みたいな思いをする人を無くせたんだ

「ちよつとだけ気が楽になったよ、ありがとう」

「役にたてたのなら光栄です！」

「じゃあ帰るか…あれ？なんか忘れてるような…」

「あつ！マツハラライドウオッチ！」

「やばっ！落としたままじゃん！」

急いで戻り探し回ったが何度探してもライドウオッチは見つからない

「もしかして翼さん達に持ってかれて研究対象にされてるんじゃない…」

「ありえますね、ど…どうしましょう！」

「取り戻しに…あのおっさんはどう対処すんだよくぞ！」

「ですね、あのおじさん凄く強かったですし」

「…探し物はこいつか？」

木陰からこちらを覗き込む影がライドウオッチを持ちこちらを見ている。

背格好から翼さんと同じぐらいの年の少女だと分かった

「翼さん達の味方って訳じゃなさそうだなお嬢さん、何者だ？」

「あんな雑魚共と同じに扱うなよ、一人でだってあんたぐらいなら片付けられるんだぜ」

「そうかい…なんでここで俺の事を待ってた？」

「お前に用があんだよ、仮面ライダーさん」

「なんでそれを…」

「みーんなあんたに興味があるって事だ、ノイズに触れても死なずシンフォギアとやりあえる力まで持つてるんだ、あたしだけじゃない世界の中から狙われてもおかしくない」

「そりゃ随分有名になったみたいだな、まるで大スターにでもなったみたいだ」

「そんな力が今はあたしの手元にあるんだ」

『マッハ！』

ウオッチのボタンを押した彼女は翼さんと同じくシンフォギアを纏っていた違いがあるとすればその装備に仮面ライダーマッハの意匠が施されている所だろう

「シンフォギアだったっけか？それ、あいつらと同じか」

「あんなのと同じに扱うなあたしのこいつは一味違うぜ！」

「ウオズ！」

「はーい！」

『ライダータイム仮面ライダージオウ！』

振るわれたムチをジカンギレードで弾き距離を取る

「意外にやるなだったらいっついでえ!!」

走り出した少女はマッハの力で加速し目にもとまらぬ速さで近づき俺を遥か後方へ蹴り飛ばした

「これが仮面ライダーの力…」

「まずいです…このままだと彼女はウオッチの力に飲まれてアナザー

ライダーになってしまいました」

「アナザーライダー？」

「本来の歴史から外れた悪のライダーが生まれるという事です」

ウオツチが少女を蝕むようにして不吉なオーラを纏っている、きつとウオズの言う通りになって彼女は怪人になってしまふのだろう

「この力があればあたしはもつと役に立てる…もう1人にならなくて済むんだ！」

歪んだ笑顔を浮かべる少女を見ていと妹の事を思い出す

「俺は1度手を伸ばしても救えなかった家族がいた…でも今は違う！2度とあんな思いはしたくない…ウオズ！力を貸してくれ！」

「お任せください王馬様！」

『ドライブ！』

ドライブアーマーを身に纏い少女とまさに音速の戦いを繰り広げる

「お前を倒してそのウオツチもあたしの物にしてやる！」

「俺は負けない…今度はこの手で助けてみせる！」

「助けるだあ？誰もそんなことは頼んじやいねえんだよ！」

「知るかよ…俺が助けたいから助けるんだ、お前の気持ちなんざ関係ねえんだよ！」

ウオズがドライブの力を使ってハンドル剣を作り出し、ジカンギレードとの二刀流で少女を切りつける

「あたしが押し負けた!？」

『ターン！ターン！Uターン！』

ドライブのスピードを生かし、周りを回転しながら少女を連続で切りつける

「次はこれです！」

ドア銃とジカンギレードの2丁拳銃で隙を作らずに撃ち続ける
「図に乗るな！」

飛んでくる銃弾をムチで弾き飛ばしエネルギーボールの様な玉を作り出し飛ばしてくる

「地面を抉る程の威力…まともに当たるとまずいな」

エネルギー弾を避け、その威力に少し身震いする

「ドライブウォッチに力を込めてください、他の姿にも変われる筈です！」

ドライブウォッチをベルトから外し力を込める、ウォッチから泊進之介さんの戦いの記憶とその思いが流れ込んでくる…

「まずはこいつだ！」

ウォッチが光り黒いウォッチに変化しドライブタイプワイルドウォッチになった

「変わった…制限はあるがいくらかのフォームチェンジは可能みたいだな」

『アーマータイム！ドライブ！typeワイルド！』

タイプワイルドウォッチを使ってジオウタイプワイルドアーマータイムに変身しハンドル剣を握る

「これならパワー勝負もマシンになるだろうよ、いくぜ！」

「姿が変わっただけで同じ土俵に立ったつもりか！」

ムチと剣がぶつかり合う、パワーで言えばこちらが劣勢だがタイプスピードに比べるとなんとか追いつけていると思える

「来い！ランブルダンプ！」

「なっ!?ドリルが飛んできた!?!」

「パワーが足りないなら足せばいいだけだろ！」

ランブルダンプ…泊さんの記憶でみたけど実物はもっと暴れん坊だ、ワイルドのパワーでないと抑えきれない

「くっ…あたしは負けられないんだ！」

もう一度エネルギー弾が飛んでくる

「それを待ってたんだよ！」

『アーマータイム！ドライブ！typeテクニク！』

タイプワイルドウォッチが光りタイプテクニクウォッチに変わりジオウタイプテクニクアーマータイムに変身しドア銃を呼び出す

「大技の後には隙があるもんだ…今なら届く！」

タイプテクニクの能力で的確に手元のライドウォッチを射ちタカウォッチロイドが地面に落ちる前にキャッチして飛んでいく

「でも…このエネルギー弾は避ける訳にもいかないよな！」

さすがに何度もこんなバカ威力のエネルギー弾を無視は出来ない、もし町に向かったら大変な事になってしまう

『アーマータイム！ドライブ！』

「ハンター！気合い見せるぞ！」

ジャステイスハンターの武器、ジャステイスケージで真っ向からエネルギー弾を受け止める

「馬鹿が真正面から受け止め…っ！」

『ヒツサツ！タイムブレイク！』

ジリジリと押されるのに対してアイアンロイミュードに放った様に背後にタイヤを作り出し自身を前方へと押し出し空中でエネルギー弾を破壊した、だがそこで俺の体に限界がやってきたようだ、力が抜け膝から崩れ落ち変身した姿も保っていられなくなってしまう

「くそ…時間切れか…ここはいったん退いてやる！力の差が理解できなかったんなら家でわんわん泣いてるこったな！」

絶体絶命の中、少女はなぜか俺にとどめをささずに帰っていく

「助かった…のか？」

「王馬様！」

あ、もう…駄目…か…も…

父の温もり

またあの夢だ、家族を失ったあの夢は何度も見たが今回は何が違った

「王馬…」

「父さん、俺はどうすればいいんだ…」

「お前は前に進め…いつまでもこんな夢に縋ってちや駄目だ…」

父さんは手を伸ばし俺の手を強く握りしめたあの日掴めなかった手から確かな温もりを感じる

「今度は手を掴み損ねるな…王馬…!」

「父さん…」

父さんが光に包まれて消えていく、その最中父さんは笑顔だった

「…馬さ…」

体が揺さぶられているのを感じ、意識がはつきりと戻ってきた

「夢か…」

「王馬様、おはようございます」

ウオズが枕元でちょこんと座っている

「何か良い夢でも見ました？」

「ああ、やっとこの手で掴むことが出来たよ」

手を照明にかざし父さんの温もりを思い出す

「それよりライドウオツチは？」

「タカちゃんがつっかり回収して持ってきましたの、お母様が心配していましたから元気な姿を見せてあげてくださいいね」

「そうするよ…あとありがとなここまで運んでくれて」

「それが…運んだのは私じゃなくて…」

「ばつの悪そうにどもるウオズ、何か言いづらい事でもあんのか？」

「翼さんが…運んでくれたんですの…」

「なっ!?なんであの人か!」

「何も言わなかったです…」

「王馬、起きたのかい？あの風鳴翼があんたを連れて帰って来たときは何事かと思っちゃったよ」

「おばさん、心配かけてごめんなさい」

「下にあんたに用があるって子が来てるよ」

俺に用？二課の連中か、それともライドウォッチを狙ってまた襲いに来たか

「分かったすぐ行くよ」

服を着替え下に降りると二課で見た女の子が友達と楽しそうにお好み焼きを頬張っていた。友達の一人は警察署まで送り届けた子だ

「君は…昨日の」

「響の知り合い？」

「うん、今日は未来たちとお好み焼きを食べるところの人に会いに来たんだ」

「響？もしかしてあのライブの生き残りか？」

あのライブには俺以外にもう一人の生き残りがいた、名前しか知らなかったが立花響、この子も二課に…

「はい、ちよつと二人で話ませんか」

お友達に声をかけ席をたち、外に出た

「立花響：俺と同じあのライブの生き残りか」

「あの…翼さんともう一度お話してみませんか」

分かってる…あの人だって辛いつてことは…

「ノイズと戦える力があるなら一緒に戦った方がきつと…」

「君は憎くないのか？あのライブからきつと辛いことが山ほどあったはずだ」

家族を失った以外にもいじめの対象にされ、おばさんに拾われるまでは親戚の所をたらい回しにされた…

「…ありました、でもそれはノイズのせいで翼さんは…」

「悪い…今日は帰ってくれ」

翼さんは悪くない…分かって…分かってるのに…そう考えていると突然力を持たないウォッチの1つが光を放った

「ブランクウォッチが…」

「それって戦ってた時に使ってた」

あの子を信じろという思いがウォッチから伝わってくる

「これは、あの子に渡せってのか？」

まだ見ぬライダーが返事を返してくれた様に感じ、ウオツチを手渡す

「これを持っててくれ、きっと何かの役に立つ」

「これは？」

「ライドウオツチ、仮面ライダーって奴らの思いや力が詰まってる、君に渡せって言われた気がしたんだ、それと…翼さんの事は俺と翼さんの問題だ、だから俺がなんとかするよ」

「私諦めません！翼さんにも認めてもらって、王馬さんと翼さんとも手を繋いでみせます！」

意気込む立花響を背に帰路につく

「翼さんとも手を繋ぐか…今度はちゃんと掴んでみせるよ父さん」

一時の休息

家に戻ると立花響の友達は何る準備をして立花響を待っている所だった

「ご馳走さまでした」

「お粗末様、それにしても響ちゃんが王馬と同じライブを見に行つてたなんてね、王馬とも仲良くしてやってね」

おばちゃんがそんな話をしているとブランクライドウオッチが微かに光を放つ

「またか、あの子の友達だからか？」

ブランクライドウオッチを4つそれぞれ4人の女の子に手渡す

「食べに来てくれたお礼だ、受け取ってくれ」

「なにこれ？」

「もし危ない目にあつても何とかしてくれるお守りみたいなもんかな」

「なにそれくアニメじゃないんだし、でもくれるって言うなら貰つとこうかな」

「ありがとうございます、大事にしますね」

「皆ー！おまたせ！」

「何の話だったの？」

「えつと…またお好み焼き食べに来ますねって話をちよつと…ね」

ブランクライドウオッチを受け取つた5人を手を振つて見送る

「ライドウオッチが王以外を選ぶなんて…初めてです」

ウオズは店から見えていたよう立花響達が帰るのを見ながらそう言った

「珍しい事なのか？」

「ライドウオッチはそれぞれ仮面ライダーの意思が宿つています、その意思に選ばれた者にしか力を示さないんです」

「俺がドライブの力を目覚めさせたみたいにあの娘たちもライダーの力を目覚めさせられるかもしれないのか」

「ライダーの意思を信じましょう」

家の中に戻り久しぶりに一息ついたような気がした俺は結局聞けずじまいだった話をウオズから聞くことにした

「ウオズ、この間のオーマジオウの話だけど」

「そうですね、色々と立て込んで結局話せていなかったですね」

部屋に戻ったウオズが昔話を始める

「どこまで話しましたっけ？」

「オーマジオウがどうこうって所だったような」

「そうでした、では…オーマジオウ様は太古の昔に全てのライダーの力を手にして世界の王として君臨していた王様でした、ですがオーマジオウ様は…あれ？」

「どうした？」

「いえ…オーマジオウ様がどうやって王の座から退いたのかの記憶が曖昧で…」

「まあ、そんなに昔の話なら忘れてる部分があっても不思議じゃないしな、とにかくオーマジオウってのが王をやめたのか」

「はい…オーマジオウ様が眠りについたのと同時に私達も眠りについたのです」

「私達？」

「はい私にはお兄ちゃんがいました、今はどこにいるか分かりませんが、お兄ちゃんはオーマジオウ様の家臣としてベルトとなりオーマジオウ様に仕えていました」

「で俺が王の資格ってのを持ってたからウオズが目覚めて俺の所まで来たって事か」

「そうです！王馬様ならオーマジオウ様が変わりこの世界の王になることができますー！」

「王ね…悪いけどそんな偉い人間じゃないんだ、王になるとかは考えられないよ」

「そんなく王馬様ならきつと立派な王様になれますっつて！」

「そもそも王ってどうなるんだよ、太古の昔と現代じゃ仕組みが違うだろ」

「それは…とにかく！ライダーの力を手にいければ王に相應しい

力を手にいれる事が出来るはずなのです！」

王様って言われてもそんなのに興味もない、ただ普通に生きていきたいだけだ

「王つてのに興味はないけど、ライドウォッチを手に入れてノイズをぶっ倒すのは俺がやる」

「はい！だったら私はそのお手伝いをいたします！」

「良いのか？王にはならないんだぞ」

「王馬様についていくと目覚めたときに決めたのです！お兄ちゃんみたいにただ王のために尽くすのに憧れていたんです、だから私は王馬様にこれからも尽くしていきます！」

「分かった、頼りにしてるよ」

天真爛漫なウオズの笑顔を見ていると妹を思い出し頭を撫でていた、嫌がる様子もなくふにやっとした顔なのでそのままで続けた

「それでは王馬様、これからはライドウォッチを手にいれるために動きましよう、ドライブウォッチとマツハウウォッチだけでは王には程遠いですから！」

「だからならねえって」

仮面のヒーロー様

『タイムブレイク!』

「大丈夫か?」

「ア…アニメみたい…」

「うん?君は…」

ライドウオッチを渡して数日たったある日、現れたノイズを倒している
とライドウオッチを渡した女の子の一人を偶然助けた

「わ、私!板場弓美って言います!仮面ライダーさんですよね!」

「な、なんでそれを…」

「皆あなたの噂で持ちきりですよ!ノイズをばったばったと倒している
仮面で顔を隠したヒーローが居るって!」

キラキラと目を光らせ見つめてくる弓美の視線が痛い、そんな噂広
めてるのはどこの誰だよ

「俺はそんな良い人間じゃないよ…ほらほら怪我がないならとつとと
帰った帰った」

そう言っただけ帰ろうとした俺の手を両手で握り弓美は俺を引き止
めた

「そのベルトに付いてるのって、これじゃないですか?」

ブランクライドウオッチを俺に見せてくる

「もしかしてふらわーのお兄さん?」

正体がバレるのはまずいな、動きづらくなる、適当にごまかそう

「そんな人は知らないな、それもよく似た偽物だろう、それじゃ俺は忙
しいから」

腕を振り払い、高く空に跳び上がり完全に振り切った。それから次
の日

「あの…お兄さんって仮面ライダーさんの知り合いなんですか」

この間の女の子達が4人でふらわーに食べに来た

「それより先に注文聞いても良いか?」

注文を全員分聞きお好み焼きを焼き始める

「この間のはお守りだって言ったら、仮面ライダーと俺は関係ないっ

ての」

「弓美、仮面ライダーなんて噂ほんとに信じてるの？」

「ほんとに見たんだって！かつこよかった…仮面ライダー様…」

目をキラキラとさせながら昨日の俺に思いを馳せている、もちろんその仮面のヒーロー様が目の前の俺とは気づいていない…はずだ

「でもこのお守り、仮面ライダー様のベルトに付いてたのと似てたんだけどなく」

「はいおまち、ふらわく特性のお好み焼きだ」

弓美達は美味しそうに食べながらウオツチと仮面ライダー様について聞いてくる

「仮面ライダー様の持ってた物と似てるんですけど知り合いとかじゃないんですか？」

「知らねえよ、似てるのも偶然だろ」

「だから都市伝説だって、きつと何かと見間違えたんだよ」

「目の前でノイズを倒してくれたんだって！」

「…分かったよ、その仮面ライダーって奴の事が分かったら教えればいいんだな」

「あつ、じゃあ連絡先交換しましょ」

また来たときに直接教えるつもりだったんだが、あんまり近づきすぎてバレても困るしな…

「俺携帯持ってないんだよ」

「王馬様！それなら心配いらないですよ！このファイズフォンXは王馬様が持つにふさわしい携帯ですよ」

2階から降りてきたウオズが携帯を持って降りてきて俺に耳打ちしてくる

「この人たちはライダーの力を目覚めさせる可能性があるんですよ、連絡は取れた方がいいですよ王馬様」

確かにウオズの言う通りか…いやしかし俺が仮面ライダーだというのがバレる心配が…うーん…

「どうしたの？」

「なんでもない、連絡先だっけか？俺は携帯の使い方知らないから

ウオズ、任せたぞ」

「はい任せてください！」

「では私達も交換しましょう」

「うん、ウオズちゃんの連絡先も教えてよ」

「はいです！王馬様をこれからもよろしくお願いしますね」

4人と連絡先を交換し、食事を終えた彼女達を見送る

「ごちそうさまでした」

「お粗末様、なんか困ったら連絡入れるよこっちも仮面ライダーの事分かったら教えてやるから」

「はいー！」

手を振る4人に手を振り返す、そしてすぐにファイズフォンXが震えた

「弓美…さっそくか」

弓美からのメールに目を通す、さっそく明日町に仮面ライダーを探しに行こうとの事だ

「ライダーの力つてのは本当にこの子が目覚めさせられるのか？」

「不安なら明日一緒に過ごしてみてはいかがですか？」

確かに自分の目で確認すればよく分かるか

「そうだな、明日は弓美に付き合う事にするよ」

新たな敵

「こりや遅刻だな…」

翌日、弓美との待ち合わせに間に合うように家を出た…だが時間通りに着けそうにはなかった

「少なくともノイズには見えないな」

待ち合わせ場所に向かう途中、初めてみる怪人が人を襲っている場面に出くわした

「ウオズ、とにかく助けるぞ」

「はい！」

変身し怪人を蹴飛ばして襲われていた人を助ける

「歩けるなら逃げ…ろ」

遠目で見えていたから気づかなかったが襲われていたのは弓美だった

「仮面ライダー様！」

「怪我したくなかったら下がってろ」

弓美を木陰に逃がし怪人を弓美から引き離す

「お前ノイズじゃないな、何者だ」

「僕は滝川空、ソラって呼んでよ」

滝川空と名乗る怪人は飄々とした態度で俺の攻撃を避け続ける

「君が仮面ライダーか、あの男の言う通り指輪の魔法使い以外の力も持つてるみたいだね」

「ずいぶんと俺の事知ってるみたいだな、その男の事聞かせてもらおうか！」

いくら剣を振ってもいなされる、だが向こうから攻撃をしてくる様子もない

「なめやがって、だったらこいつで…」

「きやあー！」

ドライブウオッチを取り出しフォームチェンジしようとした時、弓美の悲鳴が聞こえ振り返ると一人の怪人に槍を突きつけられる弓美の姿があった

「弓美！てめえ汚ねえぞ！」

「僕に気をとられすぎだよ、仮面ライダーって指輪の魔法使いと同じでお人好しなんだね」

笑いながら弓美を連れ離れていくソラ、手を出せない俺はただ見守るしか出来ない

「返してほしかったら、ライダーの力を全て持ってきてね、場所はあの廃屋で」

指を指した先には誰も住んでいなさそうなボロいマンションがある

「じゃあね、賢い選択を期待してるよ」

ソラは弓美を抱え目的地に跳んでいった

「くそ！俺は結局何も救えないのかよ」

「王馬様…」

何も出来ない無力感を力一杯近くの氣にぶつける

—————

「私をさらってどうするつもりよ！」

「うるさいなあ、ライダーの力を奪ったら帰してあげるから黙っててよ」

ソラと名乗っていた怪人は姿を人の姿に変えて仮面ライダー様を待っている

「仮面ライダー様はあんたみたいな化け物に負けないんだから！」

「僕は人間になるんだ！化け物なんかじゃない！」

首を片手で絞められ息が出来ない…

「気が変わったよ、君をあいつの目の前で殺してあいつを絶望させてやる、そうすればフアントムを生んでくれるかもしれないしね」

「フアン…トム…？」

首を離され床に倒れこむ

「僕と同じになるんだよ…君が化け物だつて言ったこの姿にね！」
「私が…死……」

それを聞いて意識が遠退いていく、嫌だ…私…死にたくない…仮面
ライダー…様……

鮮血

「王馬様…あのソラって怪人、はつきり言っただけで今のままだと勝ち目がないです」

「分かってる、最初の不意打ち以外は当たる気配もしなかった…どこかで弓美を見捨てたら俺はきつと後悔する」

もう誰も目の前で失くしたくない、策なんてなくても今は突っ込むしかない

「ハロー、君が仮面ライダーかな？」

「ソラ…！」

廃屋の窓から手を振る滝川空を睨み付ける

「弓美は無事なんだろうな」

「今のところはね、ライダーの力は持ってきたら帰してあげるよ」

手持ちのウォッチを全て見せる

「たった3つ？なんだ、指輪の魔法使いの力はないのか」

「魔法使い？」

「なんでもないよ、それを持って上がっておいで」

それだけ言おうと部屋の中へ戻り姿が見えなくなった

「王馬様、それを渡せば変身できなくなってしまう…それでも行くんですか」

「それでもだ、弓美を見捨てるなんて選択肢はない」

窓から見えた部屋に入ると縛られた弓美が気を失っていた

「約束通りライドウォッチを持ってきた、弓美を解放しろ」

「先にそれを渡してくれればこの子を返してあげるよ」

弓美を叩き起こし無理やり立たせる

「王馬…」

「安心しろ、今助けるから」

「同時に受け渡す、それでいいね」

「ああ」

ソラが弓美をこちらに投げ渡し俺はウォッチを投げる

「今だ！」

「体が…重い…!?!」

重加速をかけソラの動きを止める

「ウォズ！」

「任せてくださいー！」

ベルトの状態で待機させてあったウォズが飛んでいきウォッチを拾って戻ってくる

「お兄さんが…仮面ライダー様…」

「説明は後だ、そろそろ重加速も時間切れだ」

「そんな事まで出来るなんて、油断してたみたいだね」

弓美は助けた、ウォッチも取られてない…さてここからどうするか
「ウォズ！」

「はい！」

『仮面ライダージオウ！』

変身しジカングレードを構える

「さっき勝てなかったの忘れたの？」

「そうだよ、逃げよう！」

「駄目だ、俺が逃げたらこいつは誰が止めるんだ？」

「アニメじゃないんだから奇跡が起こって勝てる確証もないんだよ」

「だから逃げるのかよ確かに確証は無いさ、でもここで逃げたら奇跡を起こすことも出来ないだろうが！」

ソラに切りかかるがあっさり弾かれ吹き飛ばされる

「もう不意をつけない様にここで終わらせてあげるよ！」

ソラの猛攻に一方的に追い詰められていく

「これは神頼みみたいなものだからやりたくなかったがもうこれしかないか…弓美！お前もライダーの力に選ばれたんだ！」

「あたしが？」

もう頼れるのは弓美に渡したウォッチだけだ、あのウォッチに力が宿ればこの絶体絶命の状況を切り抜けるかもしれない

「ああだから俺はあのウォッチを渡した、確かにこれはアニメじゃない…だったら俺達で見せてやろうぜアニメより凄い魔法をな！」

力を振り絞りソラを引き離す

「だから力を貸してくれ弓美」

弓美に手を伸ばす

「…怖くて足が震える…でもあたしも何か出来るなら…!」

手を取り立ち上がった弓美の鞆からブランクウオッチが光を放ち
新たなライダーの記憶が見えた

「今のって…」

「ああ弓美が引き出したんだ、怖くても立ち上がった弓美の思いにライ
ダーの力が答えてくれたんだよ」

弓美は鞆からウオッチを取り出す

「その力は…!?!」

「借りるぞ弓美」

「うん、アニメより凄い魔法を見せてよね」

『ウィザード!』

「ああ見てろ、ショータイムだ」

『アーマータイム! プリーズ! ウィザード!』

魔方阵が現れ体を通ると新たな姿ジオウウィザードアーマー
に変身した

「ははっ! まさか指輪の魔法使いの力を手にいれたとはね」

「ソラ: いやグレムリンって呼んだ方がいいのか?」

「…その名前で僕を呼ぶな! 僕はソラだ! 滝川空なんだ!」

「たとえ人間に戻ってもお前はとうしようもなく化け物だよ」

「君も指輪の魔法使いと似たような事を言うんだね、そういうのイラ
つくんだよね!」

グレムリンは双剣を持ち切りかかってくるがウィザードの魔法、
デیفエンドを使い壁を作り出す

「この魔法…」

「懐かしいか?」

「いつの間にも!?!」

リキッドを使い体を液状化させグレムリンに組み付く
「お次はこいつだ」

フォールの魔法を使い地面に穴を開け下の階に落ちる

「倒す前に聞いときたいんだけど俺の事を誰に聞いた」

「教えると思うかい？」

「だよな、だったらここでファイナーレだ」

 バインドの魔法でグレムリンの動きを封じる

「待ちなよ、僕なんかの相手しててもいいのかい？」

「あ？どういう意味だ」

「僕は1度魔法使いに負けている、だから今度は保険をかけておいたんだよ」

「保険？」

「ああ町にグールを放ったのさ、速く行かないと町は酷いことになるだろうね」

「町の人が人質ってことか、さっさとお前を片付けて町に行かないと」

「君一人じゃ皆は守りきれない、たとえば僕を倒せてもね！」

 今度はこちらが不意を突かれ体制を崩した、その瞬間に上まで飛び上がり弓美を人質に取られた

「町の人どころか君は目の前の女の子も守れない、さあ！絶望してファントムを生むんだ！」

 弓美の胸に剣が突き立てられる、それはあのライブの日以降見えていなかった鮮血だった

戦う理由

「救いたいのか」

暗闇の中で声が響いた

誰だ？いや誰でもいい…弓美はもう……

「お前はあの日から何も変わっていない、何も救えずただ無力に手を伸ばすだけ」

あの日から何も…：違う…！父さんに誓ったんだ掴んでみせるって！！

「なら掴めー！」

光が差し込む、その光に手を伸ばして触れるとビリビリと全身に痛みが走った

「その力を掴めば目の前の命を救うこともできるだろう」

痛みに耐えもつと奥へと光へと光に手を伸ばすと体がバラバラになりそうな程の痛みが襲い来る

「2度と目の前で誰も死なせない！あんな思いを背負うのは俺だけで充分だ！」

光の中に確かに触れられる物があり、それを掴みとり引っ張り出す「それがお前の戦う理由か…面白い！私の力を使うといい！」

手に取った金色に輝くドライバーを腰に当てる

「ははっ！これでファントムが…」

「まだだ…まだ届く」

「何で…確かにお前は絶望したはずだ！なのになぜファントムが生まれない！」

「絶望なんてしてる暇は無いからな」

今の俺なら弓美を救える、体の底から力が湧いてくる

「予定外の事は起こったけど僕を倒せなくて残念だったね、僕を倒せていればこの子も救えたのにね、この子が死んだのは君のせいって事だ！ははっ！」

「まだ間に合う」

ウォズが暗闇の中で掴んだドライバーと同じベルトに変化した

「今度は…救うから…」

もう目の前で誰も死なせない俺はあの日に誓うんだ！

「変身！」

『祝福の時、最善！最大！最強！オーマジオウ！』

「なるほどね…はははっ！君も僕と同じだ！」

武器を振りかざし切りつけてくるがその武器は触れる直前に灰になって消えた

『ウイザードの時！キックストライク！』

ベルトの両側を押し込むとウイザードの力が足に宿り震えるグレムリンに1歩1歩近づくと逃げることも出来なくなったグレムリンに足の力を解き放つ

「君ももう…人じゃ…」

グレムリンはその場で倒れ、その体を灰にして風に流され消えていった

「怪物か…かもな…」

弓美の傷口に手をかざしドライブの力の1つマッドドクターを使い傷を治す

「うあっ！きゃあああ！」

「少し痛い但我慢してくれ…」

弓美の傷は治ったが体が限界を迎え強制的に変身が解けウオズも元のベルトに戻った

「王馬様…私今まで何して…」

「覚えてないのか？」

「はい…王馬様に急に力が溢れてから記憶がないのです」

「お兄さん…」

「弓美、もう大丈夫だ…っ！」

「お兄さん！」

突然胸が痛み口から血を吐いた、何が起きているのか理解する間もなく体が動かなくなりその場に倒れ意識を失った

「王馬…」

あのライブ会場で父さんと向き合っていた

「父さん俺もう迷わないよ、目の前で誰も死なせない…だから見守つててよ」

炎が揺らめき父さんを包み消えていった、最後に父さんは笑ってた気がする

「王馬様！」

「お兄さん！」

目を覚ました俺の無事をウオズと弓美が泣きながら喜んでいる、どうやら心配させたようだ

「助かったのか…って町に行かないと！」

「タカちゃんに見てきてもらいましたけど町の方は二課の皆さんが対処してくれました、怪我人も居なかったそうです」

「また世話になったって事か、それよりなんでファントムが居たんだ？グレムリンはウィザードが倒したはずだろ」

「私も見た！ファントムっていう化け物と戦う正義のヒーロー様！」

ウィザードウオッチが使えるようになって弓美にも晴人さんの記憶が見えたって事か

「お兄さんも晴人さんと同じ仮面ライダーなんだよね」

「そうです！王馬様は全てのライダーの力を統べこの世界を導く王になるお方！」

「ならないから、勝手に言ってるだけだから気にしないで」

「…言いそびれたけどありがとね、色々聞きたいこともあるけどヒーローには秘密もあるのは分かっているから聞かないであげる」

「悪い、そうしてくれると助かるよ」

「その代わり！私もヒーロー活動手伝うから」

「はあ!?そんな危ないことさせるわけないだろ」

「だったら話しちやおっかな」

一番握られたくない人に弱みを握られてしまったようだ

「…分かった、だけど遊びじゃないんだ絶対に俺から離れるなよ」
「はい」

調子のいい返事をした弓美の帰りを見送りこれからの活動に不安を覚えつつ帰路についた